

短期日本語プログラムの授業実践と展望

——「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み——

Practice and Prospect of Short-term Intensive Japanese Program

—— Approach to Problems and Improvements for
an Instruction of “Final Presentation” ——

藤田 恵・金庭久美子・丸山千歌

FUJITA Megumi・KANENIWA Kumiko・MARUYAMA Chika

〔要旨〕

本稿は、立教大学日本語教育センターが展開する短期日本語プログラム（短プロ）の授業実践を報告するものである。本プログラムは、2016年度の試行を経て、2017年度より本格実施をしている。当初より「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」への寄与を目指し設計されており、短プロの学生だけでなく、立教大学の正規の学生もさまざまな面で関わっている。本プログラムでは、「日本語科目」と「日本文化社会講義」の2科目を展開しており、短プロの学生はこの2科目を履修する。そして、2科目のまとめの活動として、プログラムの最終日に日本語によるプレゼンテーションの形式で「成果発表」を実施している。本稿では、短プロの2科目の特徴を述べた上で、「成果発表」の指導における各年度の課題と改善への取り組みについて述べる。そして、短プロにおける「成果発表」の指導モデルを示す。

Key word: 短期日本語プログラム、コースデザイン、発表指導、プレゼンテーション



1. はじめに

立教大学日本語教育センターでは、大学の国際化への取り組みの一つとして、約3週間の短期日本語プログラム（以下、短プロ）を実施している。2016年度の試行を経て、2017年度、2018年度は夏期（7月）、冬期（1月）の2回実施した。さらに、2019年度は夏期（7月）、秋期（12月）、冬期（1月）の年3回の実施となった。2019年度は3回の実施により、海外の大学から120名の学生が受講した。

本プログラムは、当初より「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」（立教大学日本語教育センター、2018）の実現を目指して設計している。例えば、短プロに参加する学生（短プロ生）には学生証が支給され、将来の長期の日本留学につながるよう立教大学の正規の学生（立教生）と同様の学生生活を体験する。立教生には短プロの授業への参加や、寮生活のサポートを依頼し、両者は学術面と生活面において交流をしている。

本稿では、短プロで実践している授業の概要と取り組みを報告する。特に、プログラム最終日に実施している「成果発表」の指導における課題を示し、その改善点と今後の展望を述べる。本格実施から3年目を迎えた今、これまでの授業実践をまとめ、課題を示すことは、本プログラムをより充実させ、発展させることにつながると考える。

2. 「日本語科目」と「日本文化社会講義」

本学の短プロでは、「日本語科目」と「日本文化社会講義」の2科目を展開しており、短プロ生は両方の科目を履修する。プログラムの初日には日本語のレベル判定のためのテストを行い、プログラムの最終日には2科目のまとめの活動として「成果発表」を行っている。そして、2科目の総合判定によって評価を行い、単位認定をしている。以下、「日本語科目」、「日本文化社会講義」について、具体的に述べる。

2.1 日本語科目

「日本語科目」では、プログラムの初日に日本語のレベル判定を行い、レベル別の日本語教育を行う。短プロの参加者数によって開講されるクラス数の調整を行うが、3クラス以上の場合は「①入門」、「②初級」、「③初中級」の3レベルで展開している。この科目は日本語教育センター所属の教員によって実施される。表1に、「日本語科目」の概要を示す。

①入門は、日本語学習の経験がない者を対象としたクラスである。学習目標は、基本的な名詞、形容詞、動詞を学び、自己紹介ができること、買い物ができること、生活についての説明ができることである。教科書として『まるごと』を用い、『まるごと』の学習と同時にかな学習を行っている。ひらがな学習は全員で行い、希望者のみカタカナ学習も行っている。短プロ開始当初は、ひらがなとカタカナの学習を全員に課していたが、限りのある時間の中でかな学習の時間が延び

表1 「日本語科目」の概要

クラス	①入門	②初級	③初中級
日本語レベル	日本語学習の経験がない者	非常に基本的な日本語を身につけている者	日本語の基礎的事項を習得している者
授業時間	50分×60コマ		
教科書	『まるごと 日本のことばと文化 りかい 入門 (A1)』(国際交流基金)・オリジナル教材	『まるごと 日本のことばと文化 りかい 初級 1・2 (A2) ⁽¹⁾ 』(国際交流基金)・オリジナル教材	『まるごと 日本のことばと文化 りかい 初中級 (A2/B1)』(国際交流基金)・オリジナル教材
学習目標	自己紹介ができる 買い物ができる 生活について説明できる	余暇や趣味について説明できる 食生活について説明できる 家族や友達が紹介できる	自分や家族について説明できる 旅行について説明できる 食生活について説明できる
成果発表	成果発表の準備 日本語による自己紹介 あいさつ表現	成果発表の準備 日本語によるプレゼンテーション	成果発表の準備 日本語によるプレゼンテーション、ディスカッション
課題	かなクイズ	各トピックの学習項目に合わせた宿題、クイズ	各トピックの学習項目に合わせた宿題、クイズ

てしまい、その他の活動を行う時間に影響が出たことから、進度を緩めることとし、全員で行うのはひらがな学習のみにすることにした。希望者にカタカナ学習も認めることにより、クラス内のレベル差への対応も可能となっている。

②初級は、非常に基本的な日本語を身につけている者を対象としたクラスである。学習目標は、家族や友達が紹介できること、余暇や趣味について説明できること、食生活について説明できることである。さらに、「成果発表」の際に学習した項目を使用して日本語による発表ができるようになることである。教科書として『まるごと』を用い、各トピックの最後に学習項目に合わせた宿題とクイズを課している。

③初中級は、日本語の基礎的事項を習得している者を対象としたクラスである。学習目標は、自分や家族について説明できること、旅行について説明できること、食生活について説明できることである。さらに、「成果発表」の際に既習項目を使用して日本語での発表とディスカッションができるようになることである。②初級と同様に教科書として『まるごと』を用いて学習を進めており、テキスト内にある漢字学習にも力を入れ、宿題とクイズを課している。

「日本語科目」では、ボランティアとして、立教生による授業参加も複数回行っている。立教生は、授業内活動のサポートや後述する「成果発表」の準備の支援、討論の参加をしている。

2.2 日本文化社会講義

「日本文化社会講義」は、毎回、本学の10学部から3学部の協力を得て実施しており、講義内容は、それぞれの学部教員によってデザインされている。期間中に3つのテーマを扱い、1つのテーマに対し「①事前学習」、「②講義」、「③フィールドトリップ」、「④事後学習」という順に進

める。表2に、「日本文化社会講義」の概要を示す。

表2 「日本文化社会講義」の概要

授業の流れ	①事前学習	②講義	③フィールドトリップ	④事後学習
授業時間	50分	150分	半日	100分
担当教員	日本語教員	学部教員 日本語教員	学部教員 日本語教員	日本語教員
課題	リアクションペーパー	リアクションペーパー		リアクションペーパー
使用言語	英語 または日本語	英語による講義 または 日本語による講義と 逐次通訳	英語による説明 または 日本語による説明と 逐次通訳	英語 または日本語

①事前学習は、「日本文化社会講義」のテーマの動機付けのために行う活動である。テーマに関するキーワードを学部教員が事前に提示し、実際の授業活動は日本語教員がファシリテーターの役割を担い実施している。短プロ生はテーマに関連したキーワードを調べ、それを他の学生と共有するなどして、次の②講義を聞くための準備を行う。

②講義は、学部教員が行う専門科目の講義である。学部教員の講義を受けることによって、短プロ生には本学の学部講義の一端を知り、さらに知見を広げることができる。

③フィールドトリップは、テーマに関連した場所に訪れ、実物を見たり触れたりすることにより、②講義で得た知見を深めるために行っている。

②講義と③フィールドトリップの使用言語は、英語または日本語であるが、入門から初中級レベルの短プロ生には学部の専門科目の内容を日本語のみで理解することは困難である。そこで、必要に応じて、本学の「立教コミュニティー翻訳通訳（RiCoLaS）」の協力を得て、学部教員の講義を通訳してもらい、実施している。RiCoLaSには、「日本文化社会講義」をサービスラーニングの場として活用してもらい、短プロ生にとっては、学部教員の使用言語にかかわらず、学内のあらゆる分野からのテーマの講義が受けられることにつながっており、前述した「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」の理念が特に現れている部分とも言える。

④事後学習は、ここまで学んだ内容を整理し、また、新たに生まれた学習課題などを短プロ生自身が見つけるために行っている。活動内容は学部教員が提示し、実際の活動は①事前学習と同様に日本語教員がファシリテーターの役割を担い授業を実施している。

「日本文化社会講義」では、①事前学習、②講義、④事後学習の後にリアクションペーパーの提出を課している。リアクションペーパーは、学んだ内容を振り返ったり、新たな課題を見つけるきっかけとしたりすることを目的としており、それぞれの活動の後に自由に記述させている。

これまで「日本文化社会講義」では、さまざまなテーマを扱ってきており、2019年度の講義内容は表3に示す通りである。短プロ生に期間中に3つの専門科目の講義を紹介することは、短プロ生の知見を広げるだけでなく、本学の魅力を世界に発信することにもつながっているもの

と考える。

表3 2019年度「日本文化社会講義」のテーマ

	夏期	秋期	冬期
テーマ1	「フランチャイズシステムの現状」及び「日本のコンビニエンスストアのビジネスモデルと現在の課題」 (経営学部 高岡美佳先生)	「Ethnic minority of Japan: Ainu Culture and Current Situation」 (社会学部 石井香世子先生)	「江戸時代の庶民文化」 (文学部 水谷隆先生)
テーマ2	「Tourism in Japan」 (観光学部 韓志昊先生)	「The Cultural Self-Design in Japan」 (異文化コミュニケーション学部 スティーブ・カズンズ先生)	「Universal Postal Service in Japan: Challenges in the Digital Age」 (法学部 東條吉純先生)
テーマ3	「Hayabusa2: Asteroid Sample Return Mission and Exoplanets」 (理学部 亀田真吾先生)	「Sports in Japan」 (コミュニティ福祉学部 ライトナー・カトリン先生)	「A Guide to the World of Noh Theatre」 (現代心理学部 横山太郎先生)

3. 「成果発表」への取り組み

2016年度に始まった短プロであるが、全て計画通りに進めることができたわけではない。毎回プログラムの終了後には、コースコーディネーターと「日本語科目」の授業担当者全員によるコースのふりかえりを行っており、そこであげられた課題と改善のための提案について、検討を行っている。その中で「成果発表」の準備に関しては毎回課題があがり、短プロのコースデザインにおいて、これまで最も検討を重ねている部分である。そこで、本節では短プロの活動のうち、「成果発表」に焦点を当て、その中でみられた課題と指導方法の改善の取り組みについて述べることにする。

3.1 「成果発表」の概要

短プロでは、最終日に「日本語科目」と「日本文化社会講義」のまとめの活動という位置づけで「成果発表」を実施している。形式はPowerPointを使用した日本語によるプレゼンテーションで、「日本文化社会講義」で学んだ内容に対し考察したことを発表する。「日本語科目」の時間に準備を行い、短プロ生は日本語教員の指導とボランティアの立教生の支援を受けながら準備を進めていく。そして、「成果発表」の当日には、クラスメートのほかに、ボランティアの立教生も参加し、討論に参加している。

この「成果発表」は、コースデザインを担当する筆者らの視点からは、以下のような学習効果が得られることを目的として設計している。

- ・「日本文化社会講義」で関心を持った話題について掘り下げることができる。

- ・短プロ生の所属校では経験できない日本語による発表が経験できる。
- ・スライドの視覚情報が聞き手の内容理解の助けとなり、発表後の活動の活性化が図れる。
- ・短プロ生の達成感、満足度につながる。

短プロの本格実施が開始された2017年度から2019年度までの「成果発表」の指導方法の取り組みを表4に示す。表4の左の段は、その年度の指導内容であり、右の段はその年度に課題であると思われる点を記述した。また、波線は前年度の反省を生かし、改善点として対策を講じた点である。次節ではこれらについて詳しく述べることにする。

表4 「成果発表」指導への取り組み

年度	指導内容・改善点	課題
2017年度	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の構成を示す ・発表の表現を指導する ・発表後に質疑応答を行う ・発表会を合同で行う 	<ul style="list-style-type: none"> △レベル差があり、発表の構成を示してもできない △発表内容と日本語のレベルが合わない。 △聞き手の学生に内容が伝わらない
2018年度	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>レベル別に発表の構成を示す</u> ・<u>使用言語の割合を考慮する</u> ・発表の表現を指導する ・発表後に質疑応答を行う ・<u>発表会をクラス別で行う</u> 	<ul style="list-style-type: none"> △質疑応答でよい質問が出ない
2019年度夏期	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>レベル別に発表の構成を示す</u> ・<u>使用言語の割合を考慮する</u> ・発表の表現を指導する ・<u>発表後に発表者から問いかけを行い、ディスカッションを行う。</u> ・発表会をクラス別で行う 	<ul style="list-style-type: none"> △発表の準備時間が足りない
2019年度秋期	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>レベル別に発表の構成を示す</u> ・<u>使用言語の割合を考慮する</u> ・<u>発表の表現を指導する</u> ・<u>発表後に発表者から問いかけを行い、ディスカッションを行う</u> ・発表会をクラス別で行う 	<ul style="list-style-type: none"> △指導方法の検討と改善についても教師間で積極的に話し合う必要がある

3.2 これまでの取り組みと課題

3.2.1 2017年度と2018年度の取り組み

2017年度は、「日本語科目」の授業内で発表の構成を示し、表現の指導をして準備を進め、「成果発表」当日は、全員が同じ教室で発表を行い、発表後に質疑応答の時間をとるようにした。しかし、発表の構成と表現が一部の短プロ生の日本語レベルと一致しておらず、発表者自身が日本語の理解が進まないまま行われるという状況となってしまった。また、聞き手の学生にとっては、スライドによって視覚情報が与えられてはいたものの、自身よりも上のレベルのクラスの発表内容が伝わらないという問題もあった。

そこで、2018 年度は、教材開発を行い、「日本語科目」のレベルごとに発表の構成と表現を示すようにした。さらに、日本語で発表する部分と英語で発表する部分の割合を、レベルごとに設定し、日本語の発表で使用する表現とスライドの表現をフォーマットとして提示するようにした。これにより、個々のレベルに合った明確な目標を設定することができ、適切な指導が行えるようになった。また、発表会をレベル別に行うことにより、聞き手の学生にも発表内容が伝わるように改善が見られた。しかし、発表後の質疑応答の時間が有効に活用されないという課題が残った。その理由として、聞き手側の発表内容の理解の未熟さが考えられる。「成果発表」のテーマ選定は、前述のとおり「日本文化社会講義」の内容から発想を得たものとしており、毎回多様なテーマの発表が行われる。この多様なテーマによる「成果発表」は、教師の視点から見ると、個々の興味、関心を深く掘り下げることにつながっており、肯定的にとらえているが、一方で、クラスメートの発表内容についての情報が足りないため、聞き手の理解につながらず、質疑応答を活発に行うことが難しいのではないかと思われる。

3.2.2 2019 年度夏期の取り組み

前節では、これまでの「成果発表」への指導の取り組みと課題について述べた。本節では、これまでに改善を続けてきた「成果発表」の形式と指導方法をさらに見直し、今後の展望について述べる。

表 5 に、2019 年度夏期の「成果発表」の概要を示す。

表 5 2019 年度夏期の「成果発表」の概要

クラス	入門	初級	初中級
発表形式	PowerPoint を用いた日本語によるプレゼンテーション		
発表構成	①自己紹介を含む導入部 ②日本文化社会講義で学んだ内容から考察したこと ③ディスカッション		
使用言語	①を日本語、②③を英語	①②を日本語、③を英語	①②③を日本語
クラス人数	A：15 名 B：14 名 C：15 名	D：14 名	E：9 名
発表時間	ペア発表で 15 分	個人発表で 10 分	個人発表で 20 分
準備時間	50 分×10 コマ		
オリジナル教材の内容	自己紹介 プレゼンテーションのあいさつの表現	プレゼンテーションの構成 発表のための易しい表現	プレゼンテーションの構成 発表のための表現

前節で述べた通り、これまで「成果発表」の指導方法は、検討と改善を重ねてきた。その結果、2019 年度夏期は、2018 年度に引き続き、「レベル別に発表の構成を示す」と「使用言語の割合を考慮する」ことに注目し、改善を試みた。発表の構成は「①自己紹介を含む導入部」、「②日本文化社会講義で学んだ内容から考察したこと」、「③ディスカッション」とし、発表で使用する言語の割合はレベルごとに差をつけ、短プロ生の日本語レベルに合わせるようにした。そして、

使用する教材にも改善を行い、それぞれのクラスの日本語レベルに合ったものを作成し、使用するようにした。具体的には、大枠としてスライドの構成を示し、各スライドを説明するための表現を添えた。発表のための表現として、入門では始まりと終わりのあいさつの表現を示した。初級ではスライドを説明するための表現を易しくしたもの、初中級ではさらに難易度を上げたものを添えた。

2019年度夏期の「成果発表」の指導において課題となったのは、「発表の準備時間が足りない」（表4）ということである。短プロ生の中には、教師とボランティア学生が手伝って作成したスクリプトを読むままになってしまい、自身の発表で使用する日本語表現を十分に理解していないまま発表に移ってしまう者も見られた。「成果発表」の準備時間は、「日本語科目」を使い50分×10コマを設定している。発表時間は、クラスサイズにより毎回調整をしているが、10分から20分で、入門はペア発表、初級と初中級は個人発表としている。この中で特に準備時間が足りないという課題が挙げられるのが初級であり、短プロにおいて、教師は、初級レベルの学生が既習項目のみで日本語での発表を行うことに特に困難さを感じている。これは、短プロの初級レベルのクラスは、他のレベルに比べて日本語能力の差が大きくなる可能性が高いことが影響していると予想される。これにより、コースデザインで設定している「成果発表」の目標が一部の学生には合致しておらず、教師間において共通の達成目標が共有しづらい状況にある可能性もある。

2019年度夏期で改善されたのは、ディスカッションを取り入れたことである。発表後の活動で2018年度まで行っていた質疑応答をやめ、ディスカッションの形式に変えた。ディスカッションでは、発表者が聞き手のために質問を用意して、意見を求める形で問いかけをするようにした。これにより、発表者は、自身の意見のみではなく、他者の意見を聞き、より知見を深めることができ、聞き手は、発表者が提示する質問について考えることにより、自身の発表テーマ以外にも考察する機会が持てるようになり、発表後の活動時間が有効に活用されるようになった。

3.2.3 2019年度秋期の「成果発表」

前節では、「成果発表」の課題として準備時間が足りないことを挙げたが、コースデザインをする上で、「成果発表」の準備以外の日本語学習時間の確保、成績評価の割合の観点から、準備時間をこれ以上とすることは難しい。このような現状の中、課題を解決するために、2019年度秋期の初級レベルのクラスにおいて、オリジナル教材の改訂と指導方法の改善に取り組んだ。

まず、初級レベルのクラスに配置される短プロ生は、日本語によるプレゼンテーションを初めて経験する学生が多いことから、教材で示す日本語表現の中に入門レベルで学習するような平易なものと一緒に提示するようにし、日本語レベルが低めの学生であっても十分に理解できる表現で発表が行えるようにした。

次に、教材の中に表現を複数パターン提示することにより、日本語レベルが高めの学生には、チャレンジができるようにし、クラスの中のレベル差に対応できるようにした。

さらに、指導方法においては、未だ発展途上の部分も多いが、これまで準備時間を自由に使わ

せて、短プロ生が一時提出したものを教師が添削するようにしていたのを、まずは教材にある表現のパターンに合わせたスクリプトを作成させ、その後短プロ生自身が教師とボランティアの立教生のサポートを受けながら肉付けを行っていき、日本語だけで準備を進めるようにした。その結果、短プロ生はスクリプトを英語から日本語にするという翻訳に頼らなくなり、ある程度の改善が見られた。

2019 年度秋期の取り組みから、初級レベルの指導方法の改善策として、今後は次のように進めるのがよいと考えられる。

- (1) 教材で示す日本語表現に入門レベルで学習するような平易な表現を加える。
- (2) 同じことを示す場合でも難易度の異なる複数のパターンの表現を提示する。
- (3) 教師が学習者のスクリプトを添削するのではなく、教材にある表現パターンに合わせたスクリプトを作成させ、その後肉付けを行い、日本語だけで完成させる。

これまでの取り組みから、短プロにおける入門レベルから初中級レベルの段階別の「成果発表」の指導内容は、図 1 のように進めていくのがよいのではないかと考える。

入門レベルでは、自己紹介とあいさつ表現の学習に力を入れ、「成果発表」の始まりと終わりを日本語で行う。初級レベルでは、発表構成のテンプレートを利用してスライドを作成し、発表原稿は易しい表現と難易度を上げた表現の中から選択してパターンに合ったスクリプトを作成し、その後肉付けを行い、できるだけ日本語で考えるようにする。また、自身の日本語レベルでは説明が困難で、英語による説明を入れるときには、切り替え表現を用いるようにする。初中級レベルでは、教材で示された発表構成に倣ってスライドを作成し、より難易度の高い表現を使って発表を行う。さらに、意見を述べる表現を練習し、ディスカッションが日本語で行えるようにする。来期は、図 1 で示した指導モデルをもとに、「成果発表」の指導の内容を組み立て、検証を行い、より充実させていきたい。

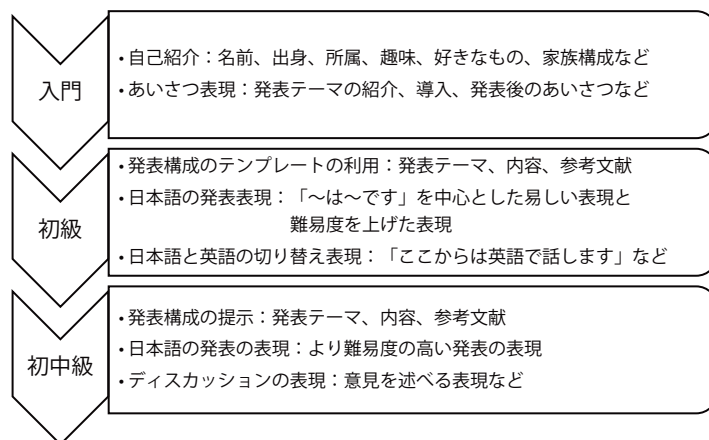


図 1 「成果発表」のレベル段階別の指導モデル

これまでの取り組みから、「成果発表」の指導モデルの整理ができた。しかし、残された課題もある。指導方法については、クラスの日本語レベルによって調整が行われるものであると考えるが、教材をどのように扱い、準備をどのような手順で進めていくかは、これまであまり教師間で話し合われたことがなかった。今後は教材の改訂だけでなく、指導方法の検討と改善についても教師間で積極的に話し合いを行い、情報を共有し、短プロに合った「成果発表」となるようにしていくのがよいと考える。

4. おわりに

本稿では、本学の短プロの授業の特徴をまとめ、さらに「成果発表」への取り組みについて述べた。その結果、短プロの「成果発表」では、「レベル別に発表の構成を示す」とことと「使用言語の割合を考慮する」ことが重要であることが分かった。さらに、初級レベルにおいては、クラス内のレベル差に対応するために、発表表現として「～は～です」といった平易な表現と、同じ意味を示す難易度の上がった表現を教材に示しておくことがよいと思われる。また、英語から日本語への翻訳に頼るのではなく、教材で示されたパターンを使用し、それに肉付けして、できるだけ日本語で考え、原稿を作成するように指導するとよいと考えられる。

約3週間の短プロのコースデザインは、1学期で行われるコースよりも時間の制限を考慮して設計する必要がある。特に「成果発表」においては、期日までに成果物を完成させなければならないことから、コースコーディネーターとして短プロの中で課題を感じている部分であった。この成果発表時の成果物の完成は、短プロ生にとって達成感と満足感につながり、将来の日本語学習への動機にもなるはずである。よって、今後もプログラム後にふり返りを行い、検討と改善を続けていきたい。

注

- 1) 初級レベルのクラスは、レベル判定のテスト結果によって使用テキストを変えており、学生の日本語レベルに合った方を選定している。

謝辞

本稿は、JSPS 科研費 17K02863-2 の助成を受けたものです。2019 年度日本語教育学会秋季大会交流ひろばで出展した「短期日本語プログラムにおけるプレゼンテーションの指導——限りのある時間を利用した指導方法とは——」（藤田・金庭）の内容を大幅に加筆修正しました。発表の際、貴重なご意見ご提案をくださった皆様にお礼申し上げます。

また、本稿で述べたプログラム改善への取り組みを進める中で、立教大学日本語教育センターの兼任講師の先生がたには多くのご示唆をいただきました。先生がたのご尽力とご協力にお礼申し上げます。

げます。

参考文献

立教コミュニティー翻訳通訳- RiCoLaS (Rikkyo Community Language Service)

<https://www2.rikkyo.ac.jp/web/ricolas/> (2019.12.1 アクセス).

立教大学日本語教育センター (2018) 『シリーズ 新しい日本語教育を考える 7 短期日本語プログラムは大学の国際化にどのように生かせるか』.

立教大学日本語教育センター「立教大学短期日本語プログラム」

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/english/sijp/default.aspx> (2019.12.1 アクセス).

